武道授業　実践の概要紹介

北海道・壮瞥町における中学校武道授業（剣道）の実践報告

壮瞥町教育委員会

壮瞥町は北海道の南西部に位置する人口２４９０人（平成31年３月末）の小さな町である。その昔、先住のアイヌ民族のひとが、洞爺湖の水が唯一流出し、落下する勇壮な滝を見て、滝（ソー）のある川（ベツ・ペツ）と呼んだことが地名の語源とされている。特別天然記念物・昭和新山のある町、大相撲の第55代横綱北の湖の出身地でもある。戦前戦後を通じて、鉄鉱石や硫黄を産出する鉱業も盛んで、昭和33年のピーク時には、人口が８０００人を超え、中学校も5校あった。その後、海外からの原料の輸入、産業構造の変化により、鉱山は閉鎖が相次ぎ、人口は急減した。現在は農業と観光、医療・福祉が主産業となっている。

昭和新山と三松正夫像

1　壮瞥町の剣道

壮瞥町の剣道は、昭和33年4月、久保内地区にひとりの警察官が着任し、青少年の健全育成を目的として、「久保内剣友会」が創立されたことを嚆矢（こうし）とする。その10年後、役場所在地の滝之町地区に、「壮瞥竹友会」が設立される。両団体はライバルとして切磋琢磨、全国レベルの大会で準優勝するなど、北海道の強豪チームに育ち、「剣道の町・壮瞥町」として町内外に浸透していった。

2　武道授業で剣道を採用

平成24年4月から、中学校の体育の時間に武道が必修科目となった。これに対し、町内では、教育委員会と中学校（当時2校、平成29年4月久保内中学校は壮瞥中学校に統合）で採用する武道についての協議が行われ、安全性、指導者の確保、保護者の費用負担などについて検討された。

剣道は適切な指導の下では、安全性が高い武道であること、壮瞥町には高段位をもつ指導者が揃っていることが評価された。また、剣道はお金がかかるとのイメージがあるが、防具は教育委員会が予算措置し、各学校の生徒の分を学校備品として用意すること、着衣は日常着用している体育着とすること、保護者には、竹刀と日本手ぬぐいを用意してもらう方向性が示された。協議の結果は、その歴史や諸般の環境から総合的に判断して、武道授業として剣道を採用することとなった。

武道授業開始当時、町内には中学校が2校あり、それぞれの中学校の最大学年生徒数を勘案し、30組の剣道具と面用のアイガードが用意された。それに要した費用は46万8300円であった。

壮瞥町立壮瞥中学校

3　指導体制の構築

壮瞥町内中学校の武道授業の時間数は、1学年、年間6時間である。この配当された時間割のなかで、生徒に何を伝え、何を学んでもらうか、「壮瞥中学校方式」の検討が迫られた。

まず、それぞれの校下にある壮瞥竹友会、久保内剣友会に講師派遣が要請された。生徒数の少ない久保内中学校は、ひとりの講師が担当。壮瞥中学校は、外部講師3名と初段の体育教師の計4名の指導体制とした。

複数の指導体制をとる理由は2点あり、ひとつは、ほとんどの生徒が、初めて剣道を体験する。そのなかで、礼儀作法、所作、竹刀の握り方、足さばき、素振り、防具の着装、技の練習などの指導項目が多数あり、分からないことで授業への興味・意欲を失墜させたくない、落ちこぼれる生徒をつくらない配慮が必要と考えたからである。

例えば、防具の着装の「しばる」行為に困惑する生徒がいた。ワンタッチの脱着に慣らされた現代っ子には、ヒモをしばることが難しいらしい。ここで時間を費やすと、授業の進行にも影響がでる。少しアドバイスすると学習能力の高い中学生世代は、すぐマスターする。戸惑っている仲間がいると、お互いに教えている生徒もいる。分からないし、誰も教えてくれないから剣道の時間は嫌いだ、とならないような配慮が必要と感じた。このちょっとしたアドバイスが、剣道授業の興味を持続させるポイントのひとつとなっている。

もうひとつの理由は、元立ちの人数の確保である。生徒には、素振りで竹刀操作、手の内などを指導するが、実際に防具を着けて稽古になると、いわゆる「薪割り剣法」になって力の入った打突になる例が散見された。中学生ともなれば力も強く、最初から生徒同士で打突させることは、ケガ（特に小手）につながる危険性も懸念される。

まず、段階的に、指導者（4名）

剣道授業の様子

防具の着装は、指導者がアドバイスすることによって時間の短縮に努める

が元立ちとなって、指導しながら生徒同士の稽古に移行する方法が適切と考えたからである。幸いにして、指導者の確保ができる環境があった。現在指導にあたっているのは、教士七段2名、錬士六段3名、六段1名、五段1名である。退職者の筆者が毎回出席し、他の6名は現職であるので、仕事の予定を勘案してローテーションを組んでもらい、出席している。6名のうち、4名は役場職員、他の2名は高校の事務職員と消防職員である。職場の理解をいただきながら、「職務専念義務免除」の扱いにしてもらっている。

4　武道授業計画と実践

授業の時期は11月上旬。午前中に1年生から3年生まで3回連続して行われる。平成30年度の各学年の在籍数は、1年生22名、2年生20名、3年生18名となっている。

6時間の授業を通じて、有効打突（一本の技）を打てるよう、工夫・学習・努力すること。そのなかで、礼儀作法・所作を学ぶとともに、相手への思いやりや感謝の心が育つことを期待している。

生徒は授業開始前にランニングなどで準備運動を終える。授業開始のチャイムとともに、正座し、生徒代表の発声で黙想し、心を落ち着かせる。体育館での授業であるが、出入りの際は指導者が一礼するのを見て、生徒も自発的に励行してくれている。

体育担当教諭が、開始にあたり注意事項と当日の講師を紹介する。次に外部講師の主任が、その日の授業の内容と進め方を説明し、実技に入る。授業の目標である有効打突については、当初の段階で説明する。「充実した気勢（気合い）」、「適正な姿勢」、「竹刀の打突部で」、「打突部位を」、「刃筋正しく」、「残心」などを墨書し、生徒が意識するように壁に掲示している。

次に、授業計画を紹介したい。

1年生

1時間目　剣道の歴史、礼儀作法（座礼、立礼）、模擬刀を示し、竹刀について説明、基本姿勢、竹刀の扱い方・握り方・構え、足さばき

2時間目　素振り（上下振り、正面打ち、左右面打ち）手刀による打ち込みのイメージづくりと送り足の練習、剣道具の着装及び面タオルのかぶり方練習

3時間目　素振り、指導者に対して一本打ちの技（面・小手・胴）、二・三段打ちの技（小手～面、面～面、小手～胴、小手～面～胴）

4時間目　素振り、指導者に対して一本打ちの技、二・三段打ちの技、応じ技（小手抜き面、面抜き胴、面返し胴、出ばな小手）

5時間目　素振り、4時間目の復習、指導者に対して打ち込み稽古

6時間目　まとめ、生徒同士の稽古（技の復習）、試合稽古

2年生

1時間目　礼儀作法、基本姿勢、竹刀の扱い方・握り方、構え、剣道具の着装及び面タオルのかぶり方練習

2時間目　素振り、指導者に対して一本打ちの技、二・三段打ちの技、打ち込み稽古

3時間目　素振り、指導者に対して一本打ちの技、二・三段打ちの技、応じ技、指導者に対して打ち込み稽古

4時間目　素振り、指導者に対して一本打ちの技、二・三段打ちの技、応じ技、生徒同士の稽古（技の復習）、指導者に対して打ち込み稽古

5時間目　素振り、生徒がお互いに一本打ちの技、二・三段打ちの技、応じ技、生徒同士の稽古（互角稽古）

6時間目　まとめ、試合稽古

3年生

1時間目　礼儀作法、基本姿勢、構え、足さばき、素振り、剣道具の着装練習

2時間目　素振り、指導者に対して一本打ちの技、二・三段打ちの技、応じ技、打ち込み稽古

3時間目　素振り、指導者に対して切り返し、一本打ちの技、二・三段打ちの技、応じ技、生徒同士の稽古（技の復習）、指導者に対して打ち込み稽古

4時間目　素振り、生徒がお互いに一本打ちの技、二・三段打ちの技、応じ技、生徒同士の稽古（互角稽古）、指導者に対して打ち込み稽古

5時間目　4時間目と同じ内容

6時間目　まとめ、試合稽古

5　剣道授業の生徒の反応（アンケート調査から）

壮瞥中学校では、平成30年度の3年生14名にアンケート調査を実施した。質問は5問あり、最後に自由記入の感想となっている。

第1問の、「剣道に興味や親しみをもつことができましたか？」については、14名中13名が「はい」と答えている。

第2問の、「授業協力者（専門家）の先生に指導を受けてどう感じましたか？」については、「絶対にいた方がよい」が6名、「いた方がよい」が8名。その理由として、「悪いフォームの時、アドバイスをくれて活かすことができるから」「しせいとかが悪かったらすぐ教えてくれるから」「たくさん練習できるから」「色々なことをおそわれるから」「身近に専門家がいることですぐに修正点を見つけられるから」「分かりやすく、色々なうちをおぼえやすい」「優しく指導してくれた」「おてほんになってくれるから」「わかりやすいため」「経験者がいないと分からないことが多いから」と記入されていた。

第3問の、「剣道は、実際やってみてどういう感じがしましたか？」については（複数回答可）、「面白い」9名、「強くなれそう」5名、「礼儀を重んじる」6名、「歴史、伝統を感じる」6名、「かっこいい」5名、「集中する」2名。その他では、「じゅんびがたいへん」「楽しい」「ぜんそくがひどくなる」などの記述があった。

第4問の、「日本の伝統的な考え方や態度が剣道の学習のなかで身についたと感じますか？」については、14名全員が「学べた」と回答した。「特にどんなことを学びましたか？」（複数回答可）については、「礼を重んじる心」8名、「公平、公正な態度や正義を重んじる心」2名、「仲間への思いやりの心」4名、「苦しいことから逃げない心」1名、「勇気」3名、「自信」1名、「我慢する心」2名、「感謝の心」3名、「ルールを守ること」7名、「目標に向かって粘り強く行動する心」3名となっている。

第5問の、「剣道を来年度も学んでみたいと思いますか？」については、「やってみたい」6名、「できればやってみたい」5名、「あまりやりたくない」3名であった。

「武道（剣道）の授業で学んだことや感想を書いて下さい」の自由筆記（原文ママ）では、「1年生の時は、全然できなかったり、わからなかったルールとかもわかるようになったし、もっと色々な技を学びたいと思うようになりました。18時間、剣道を学ぶことができてよかったです！」「勝つことができなかったけどとても楽しか

ったし、あきらめないこと、目標に向かってつき進むことを学んだ気がした」「中学校に入って初めて剣道をやったけど、思っていたより楽しかった」「久しぶりの剣道だったけれど、意外と覚えていて楽しくできました。日常生活であんまりやらない足とかだったけれど、しっかりできました。礼儀さほうなど剣道で学んだことをしっかりこの後いかしていきたいです」「剣道のもとは刀だということから、意外と本物の刀でも使う技などが残っていることがわかっておもしろかった」「3年間計18時間やってみて、礼ぎさほうや残心のことなどたくさんのことを教えてもらうことができてよかったです。またこれからの生活にすこしでもやくだてればと思いました」「3年生になってからはあまりできなかったけれど、1～2年生のときできてよかった」「戦っている相手にも礼を重んじて、試合を行っていて、相手を尊敬しながらやる競技なんだなと思いました」「剣道の歴史やルールを学んだ。あいさつなどをしっかりしようと思った」「剣道はやってみて楽しかった」「相手に感謝の気持ちを持って、礼儀正しくできたのがよかったです」「1本が入ってもそのあとの体勢や相手の心を思うことがないと1本にならないのはすごくいいと思った」「相手がいたいから防具のところをうたないとだめだと思った。しせいを正しくするのが大事」などと記述されていた。

6 まとめ

わが国の伝統文化である剣道を、IT世代の現代っ子がどのように受け止めるであろうか。期待と不安が交錯するなか、授業は始まった。中学生は興味を示し、真剣に取り組んでくれた。担当教師が剣道授業への適切な動機づけをしてくれたこと、生徒と外部講師のコーディネートがスムーズであったことが要因である。感謝申し上げたい。

生徒同士の自由稽古のとき、「お前、何でそんなに強く打つんだ！」「痛かったか！　ごめん、ごめん」。そんな会話が聞こえる。少子化が進行する社会で、「兄弟げんか」は過去の懐かしい想い出として風化した。身近で相手の痛みを知る機会はなくなってきている。

剣道は対人競技であり、相手なしでは成立しない。その相手を打突しながら自らの技能を習熟していくのであるから、相手への尊敬や感謝の気持ちを堅持することが大前提と考える。痛みを知る、相手への尊敬・感謝の気持ちを忘れない。これも剣道授業に期待される効果であろう。

礼儀、気勢、間合い、残心。これらは実社会でも応用できる。国際化が進展すれば、その国の伝統文化への理解度が問われる。筆者はこの2年間、中国企業の職員研修の一環として実施された「剣道体験」のお手伝いをする機会があった。劇画の影響ばかりでなく、その真摯な研修態度には日本の伝統文化に触れてみたいという切なる興味を感じさせた。中学生のアンケートでも、未知の剣道との出会いに、好意的、前向きな回答が多かった。

剣道授業が始まってまだ7年であるが、剣道授業には大きな可能性と効果を感じている。今後も地域の人的資源を活用し、中学校の剣道授業に協力していく所存である。

壮瞥中学校武道授業外部講師
谷岡康徳